

秋の風

山田真砂年

街中をあふるる音も秋めける
苦行する釈迦の肋や秋の風

山見ゆる安堵や秋津群れなして
日の暮れてほのと明るし蕎麦畠
アワダチサウ通過列車に泡立ちぬ
フクシマは今も背高泡立草

モノレールの腹を見上げて秋の雲
とんばうのたひらに飛んで水の上
とんばうの止まれば搖るる草の丈
一つ灯に集まつてくる夜学かな

八朔や慈善バザーの公民館

赫々と残暑の道に影歪め
蕎麦の花山襞を這ふ雲まぶし
コスモスや墓のまはりを吹かれをり
脚高く渡る秋草茫々と

朝から晴れて風も稻刈日和かな
阿夫利嶺の水に沈めり新豆腐
葛匂ふ駅なり乙女とふ名なり
日蓮の花押なむなむ秋の風

地の色のあらはや曼珠沙華五本
彼岸花群れて隙間のあからさま
菊枕沈むがごとく寝入りけり
破蓮や鴉も腹のへりし頃
彼岸花茎ついついと果ててをり
隆起せし地層荒々崖すすき